

第1章 八千浦の歴史

1 八千浦の由来 2 八千浦村から直江津市へ

1 八千浦の由来

原始時代から弥生時代頃まで

この地域は今から約7万年位前の潟町砂丘の古砂丘砂層（いくじ）ができはじめてからできたようです。そのころ、海面は今よりも100mも低くなっていました。

2万年位前には関川と保倉川は海岸近くで合流し、夷浜と西ヶ窪浜の間から海に流れていました。現在でも西ヶ窪浜の諏訪神社のあたりが低くなっているのは、その名残りでしょうか。

1万8千年位前には地球が最も寒くなり、平均気温で7～8度位低くなり降り積もった雪が氷となって夏でも溶けず、海面は今より120mも低下しました。ですから、波打ち際はずっと北の方にあったことになります。その時の波打ち際から、今の波打ち際までの比較的平らな部分が大陸棚です。

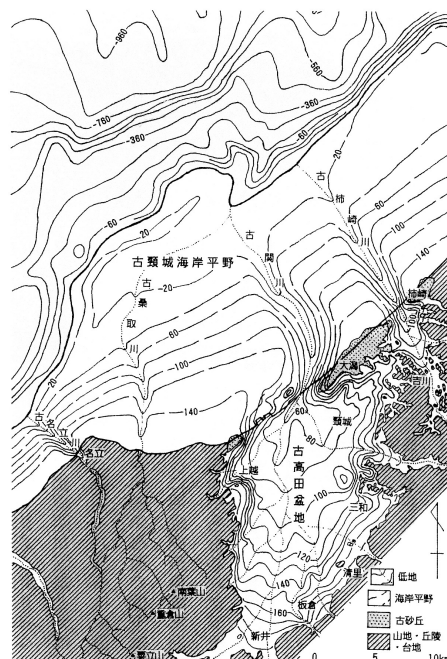
6千年位前になると地球が段々温かくなり、凍っていた氷が溶け出したため、水位が上がり逆に今よりも2mも高くなりました（「縄文海進」と呼ぶ）。JRの線路の南側に広がる田圃は満々と水をたくわえ湖のようになっていました（「古高田湖」と呼ぶ）。そんな頃に、この海岸に人が住み着いて生活を始めたようです。それは縄文式土器が夷浜から出土したことでわかります。川が上流から運んできた土砂で、湖のようになっていた所に段々堆積し、また、海岸にも新しい砂丘ができ始めました（「新砂丘」という）。この砂丘は川が運んできた土砂が、西北の風で吹き飛ばされてできたものであります。

4600年位前に地殻変動が起こり、北に流れていた保倉川が西に向きを変え、それまでの保倉川には水が流れなくなりました。その川跡は、百間町新田あたりから松橋あたりまで、サンベ（「サンペイ」ともいう）と呼ばれ、航空写真や地形図からはっきりとその姿を確認することができます。これが古保倉川と呼ばれ、川の蛇行の様子が今でもよくわかります。同時に関川も流れを変え、南から真っ直ぐに北へ流れるようになりました。夷浜と西ヶ窪浜の間にあった川は、海から吹きつける砂で埋まりました。

紀元前3～400年位前には地球が少し寒くなり、水が凍り海面が今より3mも低くなりました。この頃が弥生時代です。この頃海岸近くに住んでいた人々は海の幸を主に食料にしていたものと思われます。西北から吹きつける強い風で砂が飛んでくるため、生活するには大変な苦労があったものと思われます。

平安時代以降

平安時代には、3mも低下した海面が徐々に上昇し（「平安の小海進」という）、現在の地形がほぼできあがりしました。この頃、頸城区の榎井には荘園がありました。当時は渺茫たる砂地



（約2万年前の地形 上越市史）

で仁和（9世紀末）の頃人が移住し、開拓を始めたといえます。穴を掘り、砂の壁を作りその間に茅葺きの粗末な家を建てて住んでいました。もちろん生業は漁業と塩焼きです。生活ができるだけという極貧の状態でした。

親鸞上人が越後に流され居多が浜に上陸した時（1207）、塩焼きの煙がたなびいていました。1488年の「梅花無尽蔵」によれば、犀浜では塩焼く煙がかすみのようにたなびいていたとのことであり、このことからこの辺一帯は漁業と塩焼きがずっと以前から行われていたことが分かります。

中世末期の上杉景勝の文禄検地（1595年）によれば八千浦村は次の表のとおりです。これを絵図に描いたものが慶長2年（1597）の越後国頸城郡絵図です。（表紙裏参照。）

村名	家数(軒)	人数(人)	年貢高
黒江村	24	84	28石1斗4升
上荒浜村	11	33	14石3斗
大あらは海	25	115	46石3斗6升
ゆこうし村	8	25	20石
高かまや村	3	10	2石
ゑびすは海村	25	85	72石1斗7升7合
西ヶ窪村	30	98	42石6斗

左の表の家数はその土地の支配者がいくさや税金を集める時の基準としていたもので、そのまま住んでいた人の家の数を表すものではありません。ゑびすは海村が一番多くの年貢（税金）を納めていたようです。

当時、黒井に大慈院（天文元年（1532）、夷浜に浄泉寺（明応5年（1496）、西ヶ窪浜に宝光寺（？）の各寺がありました。大慈院や浄泉寺は今もあります。宝光寺（真言宗）の住職尊慶は上杉景勝が会津へ移った後支配者となった堀家の支配に反対し、一揆の主要な人物として活動しました。それが上杉遺民一揆です。堀家に破れ、尊慶が追放され寺は取り壊されました。尊慶を捕まえるために捕り手が潜んだ竹藪を「とりこの藪」と今でも一部の人が呼んでいます。

江戸時代の天和3年（1683）に検地が実施されました。次のとおりです。

4度竿入高帳より

村名	黒井村	上荒浜村	下荒浜村	遊光寺	夷浜村	西ヶ窪村
村高	98.992	14.742	12.465	4.978	25.140	11.186
田方	68.680					
(反別)	4.8.5.07					
畑方	9.786	0.040	1.350	0.338	2.613	1.952
(反別)	4.2.0.00	1.10	2.7.00	6.23	5.2.08	3.9.01
屋敷高		1.577				
(反別)		3.1.16				
塩高	18.426	23.125	11.115	4.640	22.527	9.234
(反別)	2.6.7.00	1.4.0.25	1.2.3.15	5.6.00	2.5.0.09	1.0.2.18
家数	86	13	13	4	22	14
人数	454	89	82	19	197	97
馬(匹)	41	5	4	2	13	8
舟(艘)		6	2	1	5	4
塩屋(軒)		10	9	2	14	5

この表で、村高の 98.992 は 98 石 9 斗 9 升 2 合で、反別 4.8.5.07 は 4 町 8 反 5 畝 7 歩です。田圃は黒井にしかありません。田圃のない村に馬がいるのはなぜでしょうか。それは佐渡の金を運ぶためです。

明治時代に入り、宗門人別改帳で把握していた人口を、戸籍でしっかりと把握することになりました。その仕事は各村々の戸長役場で行うため、かなりミスがあったようです。

当時の各村々の名前は「越後国頸城郡西ヶ窪浜村」となっていました。明治 7 年 (1874) 村 (現町内会) ごとに土地を測量し、その持ち主を特定することとなり、各村々は独自に村内 (町内) の土地を測量し、その持ち主を定めました。これは明治政府が新しく安定した財源を求めするための第一歩です。それまで荒地として課税の対象外であった土地も全部所有者を特定し課税されることになりました。明治 9 年 (1876) にその土地に対し、肥瘦の程度をもとに収穫量を定めて税金を決めようとしていました。税金の割合を決めるのに住民の意向とは大きくかけ離れている政府の案に対し、この地区では激しい反対運動が起こりました。でも結局わずかな譲歩を引き出しただけで政府の案に妥協することとなりました。

これが地租改正事業であります。

また、明治 7 年には黒井と夷浜に学校がつくられ、有能な国民を育成することとなりました。貧乏な地区の人々にとって学校の財政負担は重いものでした。夷浜校を例にとると、月々の費用はほとんどが白墨・鞭と燃料費であり、たまに書籍の費用があるものの、大半は教員給料でした。

当時の住民の生活は、それまでと変わらず漁業と塩採りで、黒井に田圃があった位です。貧しい住民は関東方面へ年間を通した出稼ぎにいき、それが各村々を支えていたようです。年間を通して出稼ぎに行けない人たちは秋から酒屋へ酒造りに行きました。これは大変な重労働でしたが、遊ぶ時間と場所がなかったため相当に大きな稼ぎとなったようです。

ついで塩が政府の専売制となり、塩を作ることができなくなりました。なお一層貧しさがきびしくなりました。漁業では、政府の方針により、エンジン付きの漁船が入り、これがトロール漁法で根こそぎ魚を捕ってしまい、しかも魚のすみかとなる海岸地底を壊してしまいました。以後段々と魚が捕れなくなっていきました。

2 八千浦村から直江津市へ

明治 22 年 (1889) に黒井、上荒浜、下荒浜、遊光寺浜、石橋新田、夷浜、夷浜新田、西ヶ窪浜が一緒になって八千浦村ができました。「八千浦村」という名前はこの時付けられました。しかし貧しいことはいっこうに変わりありませんでした。

そこで、生活の向上をめざして養蚕が入ってきました。これは短期間で現金収入が得られるので大いに広まりました。大正 6 年、西ヶ窪浜と夷浜では 16 軒の家で蚕を飼い始めました。2 か月で 2,380 円の収入となり 1 軒あたり平均 150 円のお金になりました。150 円は今のお金にすると約 50 万円位になります。当時田圃 1 反に 2 石 (米 5 俵、300 kg) の米がとれ 60 kg あたり 6 円でしたから 1 年間で 30 円にしかありませんでした。一方蚕は 1 年間に 4 回から 5 回も繭を出荷できるので住民はこぞって養蚕に励みました。蚕の餌となる「桑」を育てるために原野を開墾し畑を作ってきました。養蚕の仕事はとてもつらいもので眠る時間がなかったのですが、がんばりとおしてきました。これで八千浦村の財政も持ち直し、以後ずっとこのままの

生活が続くこととなります。でも、いつまでも繭の値段が高かったわけではありません。世界の相場で上下に変動していました。改めて世界の中の八千浦村であったことに気付かされることになりました。

この間、日清・日露の2度の戦争があり、村内でも多くの方々が従軍し、尊い命を落としてしまいました。それでも、戦勝したという勢いがあったか悲しいながらも張り合いをもって生きていました。

昭和の初め頃からなんとなく不景気であったりして異様な雰囲気でありましたが、満州事変から戦争へ突入し昭和20年の敗戦を迎えるまで、村民はただじっと耐えて生きてきました。敗戦後はものすごい不況で食うや食わずの生活が何年も続きました。その間にそれまでの土地制度が根本から改められ(農地解放)、小作していた土地がお金で自分のものになりました。さらに学校制度も変わり、小学校・中学校までが義務教育になりました。八千浦村も乏しい財政の中から前身の中学校を建てましたが、運悪く強風に遭い建設途中で倒壊し、再度建設することになりました。他方、ものの考え方がいわゆる民主主義となり、それまでの家中心の考え方が否定され、個人が尊重されることになりました。大人は考え方の変化に戸惑い、しばらくその調整に時間がかかってしまいました。当時の子供達の服は汚れ放題で弁当を持って登校できる生徒は幸せで、ふかしたさつまいもを持ってきたりしていました。不潔でシラミが大量に発生したり、のみが蔓延したりしていました。今では恐ろしいことですが、女の子の髪にDDTをかけ風呂敷でしっかりと髪を被いシラミを駆除したりしていました。男の子は頭がめ(腫物)ができ、とてもつらい時期を過ごしていました。それでも元気よく毎日を送っていました。

昭和25年朝鮮に戦争が起こり、にわかには国内の景気がよくなりどんどんと明るくなっていきました。昭和29年に直江津町・八千浦村・有田村・諏訪村・保倉村が合併し、直江津市となり、八千浦村がなくなりました。

(参考文献) 上越市史、中頸城郡誌、頸城文化、八千浦村の歴史、渡邊晴明家文書、平野孝之家文書、直江津農商学校校友会報、越後風俗志、中世越後の旅



とうみ
「唐箕」(穀物からもみ殻などを除く農具)



まゆ
繭のけば取り器

(渡邊 戈樹 記)

「八千浦の歴史」の参考資料として、八千浦小学校120周年記念誌に掲載された文章の一部を、当時の編集委員長の許可を得て本誌の巻末資料ページに添付させていただきました。合わせてお読みください。(編集委員会)